

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12214

研究課題名（和文）植民地期朝鮮における思想史研究の基礎構築（1）：民族改良・実力養成・自治論

研究課題名（英文）Building the Groundwork for Studies of Colonial Korean Intellectual History (Part 1): Racial Reform, Self-strengthening, Self-government

研究代表者

柳 忠熙 (RYU, CHUNG-HEE)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：90758202

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、植民地期朝鮮において、民族主義右派と評価される朝鮮知識人（尹致昊、崔南善、李光洙）を研究対象とし、日本の植民地という状況における朝鮮的なもの、帝国日本への戦争協力など、彼らの活動と思想の特徴を示した。また、当時発表された李光洙（文学論、民族改造論）と崔南善（出版事業関連）による一次資料（朝鮮語）の翻訳作業を行い、日韓比較研究の基盤となるアーカイブ整備を行った。本研究は植民地期朝鮮の思想史を俯瞰する長期計画（全4回予定）の第1期であり、「帝国/植民地」における学知の交流と植民地支配への日韓知識人の認識に関する日韓比較思想史の土台を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は植民地期朝鮮の思想史を俯瞰する長期計画（全4回予定）の第1期であり、帝国/植民地における学知の交流と植民地統治への日韓知識人の認識に関する日韓比較思想史の土台を構築したと評価できる。また、帝国日本/植民地朝鮮の状況における朝鮮知識人の活動と思想から、二重のナショナリズムの問題すなわち当時の朝鮮人が帝国日本の臣民であり植民地朝鮮の朝鮮民族の一員であったことを明らかにした。当時から現在にかけて日韓間ひいては世界中に存在し続けているナショナリズムによる現象を今日の問題として確認した。とくに自分たち以外を他者化して排除するナショナリズムの認識論的暴力性を意識することの必要性を示したと評価できる。

研究成果の概要（英文）：This project examined the activities and philosophies of Yun Ch'i-ho, Ch'oe Nam-son and Yi Gwang-su, major Korean intellectuals of the colonial period who were deemed conservative nationalists at the time. By tracing aspects like how they thought about the notion of "Koreanness" and how they collaborated with the wartime Japanese empire, this project outlined the major aspects of their activities and philosophies. Moreover, this project worked to create a foundation for future comparative studies of Japan and Korea by producing Japanese translation of major texts of colonial Korean intellectual history such as Yi Kwang-su's articles and Ch'oe Nam-son's writings. As the first part in a series of four parts total, this project produced results to create foundations of intellectual history with questioning about Japanese and Korean intellectuals' perspectives on governing colonial Korea, and exchanging of Academic Knowledge between to the Empire of Japan and colonial Korea.

研究分野：東アジア比較思想史

キーワード：朝鮮知識人 尹致昊 崔南善 李光洙 ナショナリズム 朝鮮的なもの 戦争協力 植民地支配

1. 研究開始当初の背景

本課題は、植民地期朝鮮において民族改良論・実力養成論・自治論を研究のキーワードとし、日本による植民地支配に対する朝鮮知識人の理解と態度を研究しようとした。具体的には、尹致昊(ユン・チホ、1865~1945)、崔麟(チュ・リン、1878~1958)、崔南善(チュ・ナムソン、1890~1957)、李光洙(イ・グァンス、1892~1950)を研究対象とした。尹致昊は、朝鮮末期には官僚でありながら民間での社会運動にも携わり、植民地期においてはキリスト教系の教育者として活躍した人物である。崔麟は、東学の後身である天道教徒であり、天道教系の教育者や言論人として活躍した人物である。崔南善は、『少年』(1908~1911)『青年』(1914~1918)などの啓蒙雑誌を刊行し、植民地期において朝鮮文化の発掘と研究を行った人物である。李光洙は、韓国・朝鮮文学史において長編小説の嚆矢と言われる『無情』(1917)を書いた韓国・朝鮮文学の代表的な文学者である。

本課題は、韓国とアメリカの大学において、東アジア比較思想、韓国・朝鮮文学、比較文学・文化の研究を行っている研究者たちとともに、韓国や日本や北米地域などで定期的に集まり、情報交換やワークショップなどを行って研究を進めることを計画した。

また、本課題の研究対象である朝鮮知識人の文章や日記などの一次資料を選別して日本語に翻訳する作業も進め、日韓比較研究のための基盤整備を行うことも計画した。

2. 研究の目的

本課題で研究対象とした朝鮮知識人には(1)日本留学(2)民族改良・実力養成論(3)対日協力という共通点がある。本課題の問題提起は、植民地支配とその最後を戦争という形で終えた歴史への反省を土台とし、日本留学を経て実力養成論・自治論を主張した朝鮮知識人の対日協力の問題を「抵抗/協力」の二項対立的に断定するのではなく、当時の文脈のなかで、彼らの論理を時代の流れとその変化に注目しながら分析し、「帝国/植民地」に身を置いた朝鮮知識人の様相を再考することができないのか、ということであった。

本課題は「植民地近代性論」の観点を共有しており、従来の政治思想の観点だけでなく、文学・宗教・教育・植民地政策という観点からも民族改良論・実力養成論・自治論者の問題を究明し、各分野との横断的な議論の可能性を模索する研究を目指した。

また、本課題は、「帝国/植民地」における学知の交流と日韓知識人の植民地支配への認識に関する日韓比較思想史の基礎の構築という、植民地期朝鮮の思想史を俯瞰する長期計画(全4回予定)の第1期であった。今回の研究は、まず実力養成論・自治論を主張した4人に焦点を当て進めたものであり、今後植民地朝鮮における(2)社会主義系知識人の問題、(3)漢学界の知識人の問題、(4)海外で活動した知識人の問題へ研究を広げ、植民地朝鮮の全体的な思想空間を俯瞰していく。

3. 研究の方法

本課題では、4名の朝鮮知識人(尹致昊、崔麟、崔南善、李光洙)を主な研究対象とし、植民地期に書かれた個人の日記、新聞や雑誌に掲載された彼らの文章や文学作品、そして朝鮮総督府をはじめとする植民地当局によって書かれた公文書の記述と日本の知識人たちの文章や発言を分析し、日本による植民地支配と朝鮮人の社会的地位の向上策に対するこれら朝鮮知識人の思想と活動を考察しようとした。

(1) 個人研究

従来の民族改良論・実力養成論・自治論に関する研究は、主に政治思想的な観点で行われてきた。本課題もこうした政治思想の観点を引き継ぐとともに、人物それぞれの個人研究の成果や植民地当局に関する研究や文学作品の分析を取り入れ、従来の研究を批判的に読解して4人をめぐる植民地朝鮮の思想空間を再考しようとした。

(2) 国際的な研究ネットワーク構築

本課題では、研究テーマの面だけでなく、国際的な研究ネットワークを構築するために、主に韓国とアメリカの若手を中心とする国際的な研究組織を作り、専門分野を超えた研究交流を進めていき、今後の後続研究を準備しようとした。

(3) アーカイブ作業

韓国・朝鮮学の隣接分野との学術的コミュニケーションのためには、まず一次資料の日本語訳の作業、つまりアーカイブの構築が必要である。そこで、朝鮮語で書かれた関連の一次資料の日本語訳を同時に進め、日韓比較研究のための基盤整備を行うことを計画した。

4. 研究成果

(1) 個人研究

「個人研究」においては、植民地期の尹致昊、崔南善、李光洙を中心とし、植民地期朝鮮での活動、〈朝鮮的なもの〉への認識、帝国日本への戦争協力などの問題を明らかにした。国内外で研究発表を行い、その主な研究成果は以下のとおりである。

[学術論文①]

柳忠熙「戦時期における崔南善のアジア認識と〈朝鮮的なもの〉」『年報朝鮮学』25、九州大学朝鮮学研究会、2022年12月（査読有）

[学術論文②]

柳忠熙「〈朝鮮的なもの〉の特殊化と普遍化：崔南善の不咸文化論・神山巡り・時調創作」『年報朝鮮学』23、九州大学朝鮮学研究会、2020年12月（査読有）

[学術論文③]

柳忠熙「少年雑誌の啓蒙性：山縣悌三郎の『少年園』と崔南善の『少年』」『外国学研究』93、神戸市外国語大学、2019年

[学術論文④]

柳忠熙「朝鮮知識人の戦争協力と〈朝鮮的なもの〉：尹致昊と李光洙を中心に」『植民地文化研究：資料と分析』18、植民地文化学会、2019年

初年度の2018年度には植民地末期・戦争期における朝鮮知識人の戦争協力の問題について研究を行った。研究発表「朝鮮知識人の戦争協力と〈朝鮮的なもの〉：尹致昊と李光洙を中心に」（第4回アジア未来会議、韓国・ソウル、2018年8月）で、植民地末期・戦争期における朝鮮知識人の戦争協力の問題を、尹致昊と李光洙を中心に検討した。研究発表「朝鮮知識人から東アジアの近代を考える：尹致昊（ユン・チホ、1865～1945）を通して」（九州歴史科学研究会 月例会、2018年12月）では、拙著『朝鮮の近代と尹致昊』（東京大学出版会、2018年）の内容をもって、近代への転換期を生きた知識人の問題を考えながら、植民地期における尹致昊の人生と思想について検討した。同タイトルで2019年1月には韓国の成均館大学校でも韓国語で講演を行い、日本の研究者だけでなく、韓国の研究者ともその問題意識を共有した。Association for Asian Studies Annual Conference（英語による発表、アメリカ・デンバー、2019年3月）に参加して行った研究発表“Ch’oe Nam-sŏn’s Wartime Perspectives on Asia and Koreanness”で、崔南善の戦争協力の問題を、彼の文化論や歴史観を中心に検討した。以上の研究は、コリアンのアイデンティティに関わる〈朝鮮的なもの〉という問題を設定し、植民地末期・戦争期を生きた朝鮮知識人を再考することで、ナショナリズムによるアプローチを相対化する観点と、帝国日本への朝鮮知識人の戦争協力の内的動機とともに、植民地統治権力の暴力性などの外的要因をもとに考える観点を示したものである。

2019年度は、初年度の植民地末期・戦争期における朝鮮知識人の戦争協力の問題を続けて行うと同時に、1900～1920年代の崔南善の活動について〈朝鮮的なもの〉というキーワードで研究をより深めた。研究発表「〈朝鮮的なもの〉の特殊化と普遍化：崔南善の不咸文化論と植民地朝鮮旅行との関連性」（日本比較文学会 第81回全国大会、2019年6月）で、植民地期における不咸文化論の形成と植民地朝鮮旅行との関連性について検討した。昨年度の研究発表を整理して尹致昊と李光洙の戦争協力の問題を検討した、学術論文④「朝鮮知識人の戦争協力と〈朝鮮的なもの〉：尹致昊と李光洙を中心に」（『植民地文化研究』18、2019年7月）を公刊した。そして、崔南善の初期出版活動を、明治期の日本の少年雑誌の出版状況、とくに山縣悌三郎の活動に焦点を当てて検討した、学術論文③「少年雑誌の啓蒙性：山縣悌三郎の『少年園』と崔南善の『少年』」（『神戸市外国語大学外国学研究』93、2019年12月）を公刊した。

2020年度は1900～1920年代における崔南善の思想と〈朝鮮的なもの〉との関連性について研究を深めた。研究発表「〈朝鮮的なもの〉の特殊化と普遍化：崔南善の時調復興論と不咸文化論」（2020年度九州史学会朝鮮学部会、2020年12月）で、昨年度発表した崔南善の不咸文化論と植民地朝鮮旅行に関連して同時期に彼が唱えた時調復興論および自らの時調の創作に焦点を当てて検討した。また、崔南善に関する2年間の研究発表を総合的に整理し、学術論文②「〈朝鮮的なもの〉の特殊化と普遍化：崔南善の不咸文化論・神山巡り・時調創作」（『年報朝鮮学』23、2020年12月）を公刊した。

2021年度は、崔南善の不咸文化論と戦争協力の問題との関連性について研究を行い、2018年度に行なった研究発表の内容を発展させ、2022年度には学術論文①「戦時期における崔南善のアジア認識と〈朝鮮的なもの〉」（『年報朝鮮学』23、2022年12月）を公刊した。

2023年度は、研究発表「尹致昊の植民地朝鮮への認識：「文化政治」初期（1919～1922）」（福岡コリアン・スタディーズ [国際ワークショップ]、2023年10月13日）で、「文化政治」の初期における尹致昊の植民地支配への認識に関する問題を検討した。発表後は1920年代前半から1930年代前半までの尹致昊の植民地朝鮮認識に関する研究を続けている。尹致昊に関する研究は、2018年に出した単行本の内容に、本科研プロジェクトの研究結果を加え、韓国語で刊行する予定である。また、研究発表「解放前後における崔南善の歴史認識と〈朝鮮／韓国的なもの〉」（韓国語による発表、韓国・釜山大、2024年2月23日）で、朝鮮の解放（1945）後における崔南善の朝鮮の古代史認識と不咸文化論の変容に関して検討した。

当初は19世紀初頭から植民地末期(1930年代後半~1945年)までを早い時期から年代に沿って研究を行う予定だった。だが、時期に沿って研究を行うより、研究の各テーマを設定し、それに合わせて時期や人物を横断しながら研究を行うことが朝鮮知識人の思想をより立体的に説明できると判断し、研究計画を修正した。その後、研究テーマを設定し、それに合わせて時期や人物を横断しながら朝鮮知識人を立体的に説明する形で研究を進め、植民地末期における尹致昊・李光洙・崔南善について研究を遂行し成果を発表した。

当初のもう一人の研究対象であった崔麟については研究を遂行することができなかった。4名の知識人を本科研プロジェクトで研究対象とするのは、当初の4年間の研究期間では十分に検討することは難しいと判断し、崔麟は研究対象から外した。

2020年度以降には、尹致昊と李光洙の1920年代の思想と活動に関する研究を計画してはいたが、コロナ禍の影響で、教育環境の変化、韓国や国内での資料調査の困難もあり、順調に進められなかった。

しかし、こうしたなかでも、不咸文化論にもとづいた崔南善の〈朝鮮的なもの〉、不咸文化論と帝国日本への戦争協力の問題、朝鮮半島の解放(1945)後における崔南善の歴史記述の問題などについて研究を深め、これまでの崔南善の研究を思想史の観点から補完したと評価できる。

(2) 研究ネットワーク構築

「国際的な研究ネットワーク構築」においては、日本国内の研究者とともに、韓国(成均館大学、延世大学、高麗大学、ソウル科学技術大学、明知大学、淑明女子大学)、アメリカ(ジョージア大学)の研究者を招いて国際ワークショップおよび国際シンポジウムを7回開催(オフライン・オンラインで開催)し、海外の研究協力者と日本国内の研究者との研究ネットワークを形成した。

2018年10月19日・20日には、韓国と東京から研究者(黄鎬徳氏[韓国・成均館大学校、教授]、孫成俊氏[同、研究教授]、金牡蘭氏[早稲田大学、准教授])を福岡に招き、講演会(19日)と若手研究会(20日)を行った。黄鎬徳氏の講演は、近代朝鮮における文学の形成の問題をテーマとしたものであった。孫成俊氏は『泰西名作短編集』の翻訳と検閲の問題を、金牡蘭氏は李孝石の『緑の塔』について発表を行った。

2019年10月18日・19日には、韓国・東京・福岡の研究者(金杭氏[韓国の延世大学校、副教授]、林惟卿氏[同、研究教授]、五味淵典嗣氏[早稲田大学、教授]、金牡蘭氏[早稲田大学、研究員]、田中美佳氏[九州大学、大学院生・博士課程])とともに、講演会(18日)と若手研究会(19日)を行った。金杭氏の講演は、現代韓国における民主主義の問題をテーマとしたものであった。19日の若手研究会では、田中美佳氏は20世紀初頭の朝鮮の少年雑誌、金牡蘭氏は日韓演劇の影響関係、林惟卿氏は解放後の北朝鮮知識人のソ連紀行、五味淵典嗣氏はアジア太平洋戦争期の大東亜の表象について発表した。

2019年3月23日には、アメリカのデンバーで行われたAAS学会(Association for Asian Studies [全米アジア学会])にて、研究代表者の柳忠熙がオーガナイザーとしてパネル発表“Asia in the Colonial Korean Imagination”を企画し、“Ch'oe Nam-sön's Wartime Perspectives on Asia and Koreanness”を発表した。座長兼コメンテーターの渡辺直紀氏(武蔵大学、教授)、発表者のホ・ジャンウク氏(アメリカ・ワシントン大学、助教授)とシム・ミリオン氏(アメリカ・ジョージア大学、助教授)とともに発表や研究内容への共同作業を行った。

コロナの影響を受けていた2020年10月23日・24日には、韓国・アメリカ・福岡・熊本・東京の研究者(申明直氏[熊本学園大学、教授]、鄭基仁氏[韓国のソウル科学技術大学、助教授]、金景彩氏[武蔵大学、非常勤講師]、関東暉氏[学習院大学、非常勤講師]、シム・ミリオン氏[アメリカ・ジョージア大学、助教授]、金牡蘭氏[早稲田大学、招聘研究員]、服部徹也氏[東洋大学、講師])とともに、オンラインで講演会(23日)と若手研究会(24日)を行った。申明直氏の講演は、映画を通じてみた在日コリアンと日本社会をテーマとしたものであった。若手研究会では、鄭基仁氏は近代朝鮮における詩の形成の問題、金景彩氏は金基鎮の文学観、関東暉氏は対談「民族の哲学」における朝鮮の問題、シム・ミリオン氏は李孝石の日本語小説「ほのかの光」について発表した。

コロナの影響がまだ続いていた2021年10月22日・23日には、韓国・福岡・東京の研究者(渡辺直紀氏[武蔵大学、教授]、田中美彩都氏[西南学院大学、非常勤講師]、潘在泳氏[韓国・高麗大学校、大学院生・博士課程]、田中雄大氏[東京大学、大学院生・博士課程])とともに、オンラインで講演会(22日)と若手研究会(23日)を行った。渡辺直紀氏の講演は、日本における韓国文学のブームとその背景ともいえるフェミニズムの問題を、韓国文学の作品と解放後の朝鮮半島の歴史的な文脈とともに説明したものであった。若手研究会では、田中美彩都氏は、朝鮮総督府による朝鮮半島の家族関係調査と同化政策、潘在泳氏は朝鮮戦争後に出た韓国の小説における反共の表象、中国文学を専攻とする田中雄大氏は1920~40年代に活躍した中国のモダニズム文学者について発表した。

2022年10月21日・22日に韓国と福岡を含む日本国内の研究者(高榮蘭氏[日本大学、教授]、金志映氏[韓国・淑明女子大学校、助教授][HK 教授]、高橋梓氏[新潟県立大学、専任講師]、中川侑氏[九州大学、大学院生・博士課程])とともに、オフラインとオンラインで講演会(21日)と若手研究会(22日)を行った。高榮蘭氏の講演会は、日本における日本語文学と移民についてのものだった。また若手研究会では、高橋梓氏は植民地朝鮮の日本語創作の問題、中川侑氏

は在日コリアン文学、金志映氏は韓国現代 SF 文学について発表した。

2023年2月16日には、韓国・日本国内の多数の研究者が集まった国際シンポジウムを行った（共催：基盤研究B〔20H01252：冷戦文化形成期（1945-1970）韓国文学・文化史の再認識〕、基盤研究B〔20H01222：貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究〕）。日本における韓国・朝鮮文学研究の歩みに関する座談会（座談会タイトル「私にとっての韓国・朝鮮の文学と文化」、語り手：波田野節子氏〔新潟県立大学、名誉教授〕、白川豊氏〔九州産業大学、名誉教授〕、コメンテーター：渡辺直紀氏〔武蔵大学、教授〕、黄鎬徳氏〔韓国・成均館大学、教授〕、李泰勳氏〔九州産業大学、准教授〕）と、日本国内の若手研究者と韓国の成均館大学・高麗大学の若手研究者との研究発表会（発表者：田中美彩都氏〔学習院大学、助教〕、田中美佳氏〔九州大学、助教〕、潘在泳氏〔韓国・高麗大学、大学院生・博士課程〕、金宗喜氏〔韓国・成均館大学、大学院生・博士課程〕、金聖来氏〔韓国・成均館大学、大学院生・博士課程〕、林泰勳氏〔韓国・成均館大学、助教〕）という二つの企画で行われた。

最終年度である2023年10月13日には本科研の研究協力者とともオンラインとオンラインで国際ワークショップを行った。発表者は郭炯徳氏〔韓国・明知大学・副教授〕、シム・ミリョン氏〔アメリカ・ジョージア大学・助教授〕、研究代表者の柳忠熙であり、コメンテーターは金杭氏〔韓国・延世大学・教授／東京大学・招聘教員〕だった。柳忠熙は植民地期における尹致昊の植民地支配への認識、郭炯徳氏は戦後日本における朝鮮文学の問題、シム・ミリョン氏は植民地時代の満洲と朝鮮文学の問題について発表した。

2020年度と2021年度は、コロナ禍によってオンラインで講演会や研究会を開催したことにより、オフラインでのさまざまな研究交流ができず、十分な意見交換および研究者間の問題意識の共有という面からは懸念されるところもあった。だが、2022年度には、コロナ禍の社会的な情勢の変化に伴ってオフラインでイベントを開催することができ、研究者間に円滑な意見交換も可能となり、互いの問題意識を共有することができた。イベントの開催を、オフラインだけではなく、コロナ時代に用いたオンラインでも行うことで（ハイブリッド型）、九州地域以外の国内からの参加および海外からの参加も可能となり、空間的な制約を超えた研究ネットワークの形成の可能性をも確認した。

（3）アーカイブ作業

「3. アーカイブ作業」においては、朝鮮学以外の日本学や中国学の研究者も日本語で一次資料が検討できるようにアーカイブ作業を行っている。第1期プロジェクトでは、李光洙の論説4篇（訳者：金景彩氏、関東曄氏、監訳：波田野節子氏）〔「朝鮮人たる青年へ」（1910）、「文学とは何か」（1916）、「民族改造論」（1922）「民族的経綸」（1924）〕、崔南善の刊行雑誌関連文章抜粋（訳者：田中美佳氏）〔『少年』（1908）児童雑誌『赤いチョゴリ』（1913）、『子どもよ、ごらん』（1913）、『新星』（1914）『東明』（1922）〕の日本語訳の作業を終え、公刊に向けて作業をしている。2023年度をもって本科研プロジェクトは終了となるが、2024年度以降にも公刊作業を行う予定である。

（4）後続研究

本課題は植民地期朝鮮の思想史を俯瞰する長期計画（全4回予定）の第1期に該当するものであった。2024年度より第2期の研究プロジェクト「植民地期朝鮮における思想史研究の基礎構築（2）：社会主義思想・〈朝鮮的なもの〉」（若手研究、24K15921、2024年度～2028年度予定）が始まっており、第1期の成果を踏まえて後続の研究を進めていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柳忠熙	4. 巻 25
2. 論文標題 戦時期における崔南善のアジア認識と 朝鮮的なもの	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 25～51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柳忠熙	4. 巻 23
2. 論文標題 朝鮮的なもの の特殊化と普遍化：崔南善の不咸文化論・神山巡り・時調創作	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 21-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柳忠熙	4. 巻 18
2. 論文標題 朝鮮知識人の戦争協力と 朝鮮的なもの : 尹致昊と李光洙を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 植民地文化研究：資料と分析	6. 最初と最後の頁 47-58, 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柳忠熙	4. 巻 93
2. 論文標題 少年雑誌の啓蒙性：山縣悌三郎の『少年園』と崔南善の『少年』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸市外国語大学外国学研究	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 尹致昊の植民地朝鮮への認識：「文化政治」初期（1919～1922）
3. 学会等名 福岡コリアン・スタディーズ（国際ワークショップ）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 解放前後における崔南善の歴史認識と 朝鮮 / 韓国的なもの
3. 学会等名 韓国・釜山大学チョムビルジェ研究所「啓蒙主義と大韓帝国期雑誌チーム」国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 朝鮮的なもの の特殊化と普遍化：崔南善の時調復興論と不咸文化論
3. 学会等名 九州史学会 朝鮮学部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 朝鮮的なもの の特殊化と普遍化：崔南善の不咸文化論と植民地朝鮮旅行との関連性
3. 学会等名 日本比較文学会 第81回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 朝鮮知識人の戦争協力と 朝鮮的なもの : 尹致昊と李光洙を中心に
3. 学会等名 第4回アジア未来会議 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 朝鮮知識人から東アジアの近代を考える: 尹致昊 (ユン・チホ、1865~1945) を通して
3. 学会等名 九州歴史科学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳忠熙
2. 発表標題 朝鮮知識人から東アジアの近代を考える: 尹致昊を通して (韓国語)
3. 学会等名 成均館大学校 東アジア学院 人文韓国 (HK+) 研究所 東アジアフォーラム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryu Chung-Hee
2. 発表標題 Choe Nam-seon's Wartime Perspectives on Asia and Koreanness
3. 学会等名 Association for Asian Studies Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

【報告】福岡コリアン・スタディーズ（国際ワークショップ） https://www.hum.fukuoka-u.ac.jp/department/la/news/57 【報告】第8回 福大韓国学シリーズ（国際シンポジウム、2月16日[木]） https://www.hum.fukuoka-u.ac.jp/department/la/news/30 【報告】第7回 福大韓国学シリーズ（10月21日[金]-22日[土]） https://la.hum.fukuoka-u.ac.jp/research_column/post_1238/ 【報告】第6回 福大韓国学シリーズ（10月22日[金]-23日[土]） http://la.hum.fukuoka-u.ac.jp/research_column/post_1053/ 【報告】第4回 福大韓国学シリーズ（10月23日[金]-24日[土]） http://la.hum.fukuoka-u.ac.jp/research_column/post_734/ 【報告】第3回 福大韓国学シリーズ（10月18日[金]-19日[土]） http://la.hum.fukuoka-u.ac.jp/research_column/post_440/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黄 鎬徳 (Hwang Hoduk)	韓国・成均館大学・国語国文学科・教授	・専門：韓国文学・東アジア文学 ・研究協力内容：韓国・朝鮮の文学についての情報提供
研究協力者	金 杭 (Kim Hang)	韓国・延世大学・文化人類学科・教授	・専門：日本思想史・東アジア比較思想 ・研究協力内容：日韓の比較思想史についての情報提供
研究協力者	郭 炯徳 (Kwak Hyoungduck)	韓国・明知大学・日語日文学科・副教授	・専門：日韓比較文学・文化 ・研究協力内容：日韓の比較文学・文化についての情報提供
研究協力者	シム ミリョン (Shim Mi-ryong)	アメリカ・ジョージア大学・Department of Comparative Literature・助教授	・専門：Literature and Culture of East Asia and Korea ・研究協力内容：アメリカでの研究動向（植民地期朝鮮の文化）についての情報提供

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計7件

国際研究集会 福岡コリアン・スタディーズ（国際ワークショップ）	開催年 2023年～2023年
------------------------------------	--------------------

国際研究集会 第8回 福大韓国学シリーズ	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第7回 福大韓国学シリーズ	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 第6回 福大韓国学シリーズ	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 第4回 福大韓国学シリーズ	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第3回 福大韓国学シリーズ	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第1回 韓国・朝鮮学講演会・若手研究会	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	韓国	成均館大学	高麗大学	明知大学
韓国	ソウル科学技術大学	淑明女子大学人文学研究所	延世大学校国学研究院	
米国	University of Washington	University of Georgia		